

我樂多玩具

岡本綺堂

青空文庫

私は玩具おもちゃが好すきです、幾歳いくつになつても稚氣ちぎを脱せいしない故せいかも知
れませんが、今でも玩具屋の前を真直まっすぐには通り切れません、と
もかくも立停ひとめつて一目ひとめずらりと見渡さなければ気が済まない位で
す。しかしかの清水晴風さんなどのように、秩序的にそれを研究
しようなどと思つたことは一度もありません。ただぼんやりと眺
めていればいいんです。玩具に向う時はいつもの小児こどもの心です。
むずかしい理窟りくつなどを考えたくありません。随つて歴史的の古い
玩具や、色々の新案を加えた贅ぜいな玩具などは、私としてはさのみ
懐なつしいものではありません。何処どこの店の隅にも転ころがっているよう
な一山百ひやくもん文式ぶんしきの我楽多玩具、それが私には甚ひどく嬉しいんです。

私の少年時代の玩具といえ、春は紙鳶たこ、これにも菅糸すがいとで揚あげる奴やつ、つたこ 凧たこがありました、今は廃すたれました。それから獅子、それから黄螺ばい。夏は水鉄砲と水出し、取分けて蛙の水出しなどはひど甚く行われたものでした。秋は独楽こま、鉄銅かねどうの独楽にはなかなか高たか価かいのがあつて、その頃でも十五銭二十銭ぐらいのは珍らしくありませんでした。冬は鳶とび、口くちや纏まと、これはやはり火事から縁を引いたものでしょう。四季を通じて行われたものは仮面めんです。今でもないことはありませんが、何処の玩具屋にも色々の面を売っていました。仮面めんには張子と土と木彫の三種あつて、張子は一銭、土製は二銭八厘、木彫は五銭と決つていましたが、木彫はなかなか精巧に出来ていて、槃はん若にやの仮面めんなどは凄い位でした。私たち

は狐げどうや外道の仮面めんをかぶって往来をうろうろしていたものです。そのほかには武器に関する玩具が多く、弓、長刀ながなた、刀、鉄砲、兜かぶと、軍配ぐんぱい団扇うちわのたぐいが勢力を占めていました。私は九歳ここのつの時に浅草の仲見世で諏訪法性すわほつしょうの兜を買ってもらいましたが、鏝しころの毛は白い麻で作られて、私がそれをかぶると背後うしろに垂れた長い毛は地面ひきずに引摺る位で、外へ出ると犬が啣くわえるので困りました。兜の鉢はすべて張子でした。概して玩具に、鉄葉ブリキを用いることなく、すべて張子か土か木ですから、玩具の毀れ易いこと不思議でした。槍や刀も木で作られていますから、少し打合うとすぐに折れます。竹で作ったのは下等品かとうひんとしてあまり好まれませんでした。小さい者の玩具としては、犬張子、木兔みみずく、達摩だるま、鳩のたぐ

い、一々数え切れません、いずれも張子でした。

方々の縁日には玩具店おもちゃやが沢山出ていました。廉やすいのは扱よりど取り

百文、高いのは二銭八厘。なぜこの八厘という端よせん銭を附けるのか

知りませんが、二銭五厘や三銭というのは決してありませんでし

た。天保てんぽうせん銭がまだ通用していた故ゆえかも知れません。うす暗いカ

ンテラの灯の前に立つて、その縁日玩具をうろうろと獵あさっていた

少年時代を思い出すと、涙ぐましいほどに懐しく思われます。

私の玩具道楽、しかも我楽多玩具に興味を有もっているのは、少

年時代の昔を懐しむ心、それがどうも根本になっっているようです。

私が玩具屋の前に立った時、先まず眼につくのは旧式の我楽多玩具

で、何だか昔の友に出逢ったような心持になります。实用新案の

ねじじかけ
螺旋仕掛などには何の懐しみを有つことが出来ません。随つて小
児にまでも頭脳あたまが古いと侮あなどられますが、どうもこれは趣味の問題
ですから已やむを得ません。旧式の張子の仮面めんなどを手に把とつてじ
つと眺めていると、ひどく若々しい心持になる時と、何とはなし
に悲しくなる時と、その折々に困よつて気分きぶんの相違はありますけれ
ども、いずれにしても、その玩具を通して少年時代の夢を忍ぶこ
とは、私に取つては嬉しいことです、堪たまらないほどに懐しいこと
です。大人でないと笑われても、私はこの年になるまで、我楽多
玩具と別れを告げることは出来ません。この頃は少しばかり人形
を貰い集めていますけれど、これは道楽の余業で、ほんとうの道
楽は一山百文式の我楽多玩具にあること勿論です。しかし時代の

変遷で、その我樂多もだんだんに減つて来るので困ります。大師だいしの達摩だるま、雑司ぞうしヶ谷やの薄すすぎの木みみずく兔うさぎ、亀戸かめいどの浮うき人形にんぎょう、柴又しばまたの括くくり猿ざるのたぐい、皆みんなな私の見逃みぬされなものです。買って来てどうするといふ訳わけのものではありませんが、見るとどうも手が出したくなります。電車の中などでも薄の木兔などを担かついでいる人を見ると、何だか懐しくなつて、声をかけてみたいように思うことがあります。

こういう意味ですから、私の道楽はその後何年経たつても進歩するはずはありません。根が研究的から出発しているものでありませんから、いわゆる「通」になるべきはありません。しかし我樂多玩具に対する私の趣味は、年を取るに随つてますます深くな

るだろうと思っています。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「新小説」

1919（大正8）年1月号

初出：「新小説」

1919（大正8）年1月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

我樂多玩具

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>